

## 凡例

一、本書は、Jules Micheler『Histoire de France』のなかの「十六世紀史」を訳したものである。この「十六世紀史」は「ルネサンス」「宗教改革」「宗教戦争」「シャルル九世からアンリ四世まで」の四部で構成されており、拙訳では、そのそれぞれを一巻ずつに分けた。

一、翻訳の底本には、すでに刊行したミシユレ『フランス史』（中世編）の場合と同じく、Robert Laffont版『Renaissance et Réforme (Histoire de France au XVII<sup>e</sup> siècle)』（1982）を用いたが、Flammarion社の全集版（1978）も参照した。挿絵についても、中世編と同じJules Rouff版（1897）のそれを転載させていた。いた。

一、章立てとそれぞれの章の見出しは、底本としたラフォン社版のそれに従った。

一、人名・地名については、たとえばチェーザレはミシユレの原書の表記は「César（セザール）」であるが、イタリア式に「チェーザレ」としたように、それぞれが属している現在の国での呼び方をカタカナで表記するのを原則とした。しかし、日本ですでに慣用化しているものはそれに従った。たとえば、ベルギーの都市「Anvers」はフランス語式では「アンヴェルス」、フランドル式では「アントウェルペン」であるが、日本で慣用されている英語式の「アントワープ」にした。また人名では「Michel-Ange」はフランス語式なら「ミシユランジェ」であるが、慣用に従って「ミケランジェロ」とした。また「レオナルド・ダ・ヴィンチ」は、本来は「ヴィンチ村のレオナルド」という意味の呼び名であるが、わが国でも「ダ・ヴィンチ」を苗字のように使うのが慣用化しているし、ミシユレも原書で同じような使い方をしているのでそれに倣った。

# 目次

まえがき 2

序章 7

第一章 フランス軍、イタリアへ侵入（一四八三～一四九四年） 118

第二章 「イタリアの発見」（一四九四～一四九五年） 138

第三章 ローマにおけるシャルル八世（一四九五年） 161

第四章 二つの世界の邂逅 177

第五章 サヴォナローラ 190

第六章 チェーザレ・ボルジア 218

第七章 チェーザレ・ボルジアの凋落（一五〇一～一五〇三年） 240

第八章 ルイ十二世 256

第九章 反フランス神聖同盟（一五二〇～一五二二年） 285

第十章 ラヴェンナの戦い 300

第十一章	新生フランス	314
第十二章	預言者ミケランジェロ	341
第十三章	カール五世	377
第十四章	フランソワ一世	396
第十五章	マリニャーノの戦い(二五二五年)	408
第十六章	フランスとヨーロッパ	429
第十七章	ルネサンス、初期の性格	443
訳者あとがき		453
人名索引		470

## まえがき

「中世」の研究に注いだ一八三〇年から一八四四年までの十余年と、「フランス革命」の研究に注いだ一八四四年から一八五三年までの約十年のあと、わたしに残されている仕事は、この二つの歴史の間に「ルネサンスおよび近代の歴史」を置いて、大きな全体を接合することである。

この巻は、本来の意味の「ルネサンス Renaissance」と、それにづく「宗教改革 Reformation」と呼ばれるものから成る。もつとも、わたしたちは、これらのタイトルをシリーズ全体のなかで、それと明示することはしなかった。

全般的にいつて、わたしたちは、すでに知られている印刷本を引用することはしなかった。引用されているのは、ほとんどがこれまでに知られていない手書き写本である。

本巻の出発点と到達点を二つの長い歴史で確定したからには、その間にひろがるこのルネサンスと宗教改革の歴史はあつという間の一步である。

先の「大革命 Revolution」から「ルネサンス」に戻るには、「中世 Moyen Age」が完成して以来、

公刊されたものを見直しておく必要がある。十四世紀と十五世紀についてわたしたちが書いたこと（第三部から第八部まで）は、なんら書き改める必要がない。あれから十年の歳月が流れたが、このわたしたちの仕事が揺らぐことはまったくなかった。手書き写本の第一次史料に基づいて記述したものだからである。

フランス人の起源を扱い、学問的探求を加えたのが第一巻（第一部と第二部）であるが、変更すべきことはなかった。その構成は、わたしたちが築き上げたままで、尊敬すべき競争者たちも、それぞれのフランス史を展開するうえで、の基盤として採用してくれている。

西暦一〇〇〇年から一三〇〇年までの本来の意味での「中世」（第二巻と第三巻）については、未刊のテキストが数多く明らかにされており、それらは、この時代の慣習、ゴシック芸術などについて明確にしてくれている。文書として残されたものでわたしたちが勝手にできなかったことのできるものは、何一つない。むしろ、このあと「序論 Introduction」を読んただけに分かるように、もうしたテキストから引き出される思考をより一層厳密に追求したいというのがわたしたちの願いである。そこでわたしたちが書いたことは、中世が自らに課した理想としては真実であるが、ここでわたしたちが示すのは、中世自身によって告発されている現実である。

その結果、全体としては、最初に書いたところとそれほど違ってはいない。当時（一八三三年、第一巻を書いたころ）は中世芸術についてわたしたちに課された訓練もそれほど厳しくなかったが、わたしたちは、この原理は、生命全般の規範に従っており、現在のわたしたちみんなと同じく、人

間も人民も宗教も、死の有効な純化として解釈できると宣言した。死というのは、それほど大きな不幸であろうか？ 人は、死によって、よりよい生に再生するのではないだろうか？

そのうえ、この本は、死にゆく人々を苦しめるために書かれたものではなく、生きる力への呼びかけである。

わたしの考えでは、古代の書は、人間が自ら自分の運命を切り開くことを支持している。

「*Fabrum suae quaeque esse fortunae* 人は己の運命の作者なり」（サルステイウス）

ところが中世においては、人間は自らが作り出した巨大な集団的力によって打ち砕かれ、個人は集団に対抗するには自らはあまりにも弱いと思いついていた。それが、十五世紀になると、「人間 [l'homme]」への信頼が甦る。わたしたちは「個人 [l'individu]」を信じるのである。

ここから出て来るのが次の厄介な問題である。「進歩 *Progress*」がわたしたちに刃向かってきたのである。わたしたちが自分たちのやったことの大きさに興奮すればするほど、その大きさがわたしたちを貶め落胆させるようになったのだ。あたかもピラミッドを眼前にしたときのように、わたしたちは、自らを取るに足りない存在であるとする思いに囚われ、自らを見失うのである。しかし、それを築いたのは、わたしたち人間以外の誰であろうか？ 昨日わたしたちが創造した工業が、今日はわたしたちの前に立ちはだかる障害となり、わたしたちを左右する運命と映っているのだ。本

来ならわたしたちを元気づけ情報を提示して導いてくれる歴史が「すべてを決定するのは時代であり個人の意志など取るに足りない」と思わせて、わたしたちを萎えさせるのである。

わたしたちは、歴史を呼び覚ましたはよいが、その歴史に捉えられ、窒息させられ、打ち碎かれるのである。あるいは、歴史の重荷の下で身体をへし曲げられ、息絶え絶えとなり、新しい何かを考え出すこともできなくなる。過去が未来を殺しているのである。「芸術は死んだ」というのは、どこから来たのか？ 歴史が殺したということであろうか？

わたしたちは、歴史の名誉のため、生命の名において、そのことに抗議する。歴史をそのような石の堆積と見るべきではない。歴史とは、魂と独創的思考の堆積であり、豊かな主導性、行動と創造のヒロイズムである。

歴史が教えているのは、一人の魂は、一つの王国や帝国、一つの国家機構、場合によっては人類全体よりもはるかに重みをもつということである。

それは、どういうことから言えるのか？ ルターがその一例である。彼は、法王とローマ教会、神聖ローマ帝国に対して「否」と言い、ヨーロッパ全体を起ち上がらせた。

クリストファー・コロンブスは、ローマとそれまでの幾世紀かの歴史に対し、公会議と伝統に対して「否」を突きつけた。

コペルニクスは、学者たちと人民に対し、本能と学問、眼で見ているものや五感で捉えているところをさえ否認し、観察を理性に従わせ、一人で人類に勝利した。

それこそが、十五世紀が腰掛けている堅固な石なのだ。

一八五五年一月十五日、パリ

## 序 章

### 一、ルネサンスの意味と範囲

「ルネサンス」という好ましい響きをもつ言葉から美の愛好家たちが連想するのは、一つの新しい芸術の出現と空想力の自由な飛翔であるが、碩学の人の脳裏に浮かぶのは古代研究の復活であり、法曹家たちが思うのは古きフランスの雑然たる慣習法のカオスの上にいよいよ陽が射し始める日が到来したということである。

それだけだろうか？ 『オルランドOrlando』〔訳注・中世の『ローランの歌』を下敷きにしてイタリヤの詩人アリオスト（1474-1533）が書いた『狂乱のオルランド』〕、画家ラファエロ（1483-1520）のアラバスク〔訳注・元来はアラビア風装飾の意。主として植物をモチーフに線がもつれ合った模様〕、彫刻

家ジャン・グージョン (v.1510や1566) の妖精たち〔訳注・パリの『イノサンの泉』を飾るレリーフ〕などが護教論に縛られることなく世界の移り気を楽しませてくれるようになったことである。芸術家、聖職者、懐疑家という精神的に異なる人々が一致して、この偉大な世紀の決定的成果がそのようなものであることを示してくれている。モンテーニュ (1533-1592) の「私は何を知っているか Que sais-je?」は、パスカル (1623-1662) が知見したもののすべしであり、ボッシュエ (1627-1704) はこうした思索のなかで『プロテスタント教会変異史 (Variations)』を書いた。このようにして革命に注がれた、かくも広汎で複雑、骨の折れる壮大な努力が《無néant》しか生み出さなかつた可能性があつた。もしもこのような広大な意志が何の結果も遺さなかつたとしたら、これほど人間の思考をがっかりさせることがあろうか？

これら、やってくるのが早すぎた人々が忘れていたことは二つに絞られる。世界の発見と人間の発見との二つで、それが、他の何にもまして、この時代に属していたのだ。

十六世紀は、その偉大かつ必然的な拡大のなかで、コロンブスからコペルニクスへ、コペルニクスからガリレオへ、地上の発見から天上の発見へと進んでいった。

そのなかで、人間は自身を発見した。人間は、ヴェサリウス〔訳注・現在のベルギーの解剖学者。1514-1564〕とセルヴェ〔訳注・Michel de Villeneuveとむ。スペイン人の医師で神学者。カルヴァンにより焼き殺された。1511-1553〕によって生命とは何かを示され、ルター (1483-1546)、カルヴァン (1509-1564)、デュームラン (1500-1568)、クジャス (1522-1590) により、*vous* にラブレール (1494

1533)、『モンテペルヒョ (1533-1592)』、『シェイクスピア (1564-1616)』、『セルバンテス (1547-1616)』によつて心の神秘に分け入った。そして、人間の本性の深い基盤を測り、それをはじめて正義 (Justice) と理性 (Raison) のなかに確定した。懷疑主義者たちも信仰の樹立を助けた。なかでも、最も大胆な人「訳注・ラブレ」は、その「意志の神殿 Temple de la Volonté」〔訳注・『ガルガンチュア』に「テレームの僧院」として出て来る〕の柱廊に「入つて、ここに深い信仰を樹立せよ」と書いた。

この新しい信仰が立脚している基盤は、事実、深い。再発見された古代は、自らを好んで近代と同一視し、垣間見られたオリエントも、わたしたちの西欧に手をさしのべてきたから、時間と空間の両方で人類家族のメンバーの幸福な和解が始まったのだった。

## 二、ルネサンスの時代

奇妙に人工的で怪物的なのが中世であるが、この中世が自慢できる点があるとすれば、その持続性と自然回帰への粘着的な抵抗であろう。

しかし、揺り動かされ、剥ぎ取られながらも、常に元どおりに復そうとするのが自然であるから、

それも当然ではないだろうか？ 封建制を、それが地中に根を下ろしたままに御覧なさい。それは、十三世紀に死んだように見えたが、十四世紀には再び開花し、十六世紀にも、《カトリック同盟》が幽霊のように姿を現し、貴族階級はフランス革命にいたるまで、それを保持するであろう。聖職者階級にいたっては、言うまでもない。いかなる衝撃も、これを無くすのには役に立たなかったし、いかなる攻撃も致命傷を与えることはできなかつた。時間の経過と批判精神と理念的進歩によって打撃を受けても、聖職者たちは教育と慣習の力によって、より深層へと根を下ろした。中世は、このようにして持続したのであり、とつくに死んでいるので、「殺す」ことは困難なのである。「殺される」ためには「生きている」必要があるからである。

中世は、何度「終わった」ことであろう！

一つは、すでに十二世紀、「聖人伝[*legende*]」に代わって世俗的な詩が三十編ほどの叙事詩を流布させたとき、そして、アベラールがパリで講筵を開き、《良識 *bon sens*》をもって旧来の神学に批判を加えたときに、《中世》は終わっていた。

次に、十三世紀には、一つの大胆な神秘主義が、たんなる批判を超えて、「歴史的福音のあとを永遠の福音が引き継ぎ、聖霊がイエスを継承する」と宣言した。このとき、一つの《中世》が終わった。

さらに十四世紀には、一人の俗人〔訳注・ダンテ〕が三つの世界〔訳注・地獄と煉獄と天国〕をわがものとし、それらを自分の「人間喜劇 *comédie humaine*」のなかに取り込んで幻視の王国を變貌

## 訳者あとがき

ミシュレが『フランス史』の「ルネサンス時代史」を刊行したのは一八五五年二月一日とされる。これまでも述べたように、一八三〇年の七月革命にインスピレーションを受けて『フランス史』の執筆を決定し一八三三年に第一巻を刊行して以来、一八四四年に中世篇六巻を完成、その後、一八四七年から一八五三年までかけて「フランス革命史」を執筆・刊行したあと、中世の続きの「ルネサンス時代」に戻ったのだった。

「ルネサンス」の巻は次の「宗教改革」の巻、ついでその宗教改革への反動として起きた「宗教戦争」の巻、そしてシャルル九世からアンリ四世の治世の国内対立解消の段階を扱った巻と四巻で構成される「十六世紀史」に含まれる。本書冒頭の「凡例」に示したように、本訳書の原本は、これら四巻を合本したロベール・ラフォン社の一卷本である。(ただし、ロベール・ラフォン社「ルネサンスと宗教改革」に付されているクロード・メトラの序文はロベール・ラフォン社に交渉したもののメトラ氏は死去され、著作権を引きついでいる人が不詳とのことで本訳書に収めることができなかつた。)

なお、ミシュレは、一八五三年から一八六七年までかけて、ルネサンス以降大革命前夜までのフ

ランス史を執筆し、一八七二年から一八七四年までをかけて「十九世紀史」を著し、完成してのち、同年二月九日に亡くなったのであった。その間にも、とくに「中世篇」は何度も書き改めている。まさに、全生涯を『フランス史』のために捧げたのであった。

ところで「ルネサンス」というと、ヨーロッパの歴史において文学と芸術の創造が活発化した一つのはっきりした歴史上の現象として、いまでは誰でも容易に脳裏に浮かべることができるが、そうした文芸復興の機運が盛り上がったのは、国によって時期も異なるし、それが顕著だった国もあれば、それほど顕著に現れなかった国もある。最初に起きたのは、周知のようにイタリアで、その影響が伝播してフランスで、イングランドで、フランドルやオランダで、ドイツで起きていったのだった。

イタリアが文芸復興の最初の火付け役となったのには、さまざまな要因が考えられるが、一つは、キリスト教的ドグマに制約されない、人間本来の美の基準を教える手本としてギリシア・ローマの古典古代の遺産が身近に存在していたことがある。イタリアにとって、ローマのそれともと身近にあったことは、イタリアの諸都市がローマ時代の都市を基礎とし、そこから資材を剥ぎ取って築かれたことから、当然であったが、ときあたかも、もう一つのローマの生き残りであるビザンティンが東方オスマン・トルコの勢力拡大によって滅亡の脅威にさらされ、ギリシア学者たちがイタリアに逃げてきたことも、契機の一つになったことは、すでに多くの研究者によって指

## 人名索引

※歴史的に実在した人物だけでなく、神話・宗教上の人物、文学作品に登場する人物名も抽出した。欧文表記は、ミシュレの原著に従った。

### 【ア行】

- アイオロス Éole 115  
アイスキュロス Eyschyle 327  
アヴィセンナ Avicenne (イブン＝スィナー) 36, 37  
アヴェロエス Averroès (イブン＝ルシュド) 36, 37  
アウグストゥス Auguste 46, 330, 348  
アウルス・ゲリウス Aulu-Gelle 339  
アエネイアス Enée 322  
アグリッパ Agrippa (ベルギーの医師) 344, 388, 450  
アーサー王 Arthur 381  
アストーレ・マンフレディ Astorre Manfredi 238, 245  
アダム Adam 45, 94  
アッティラ Attila 325  
アッラー Allah 45  
アテナ神 Athéna 51  
アトラス Atlas 369  
アドリアン・フォン・ユトレヒト Adrien d'Utrecht (ハドリアヌス六世) 390  
アドルフ・ド・クレーヴ Adolphe de Clèves 227  
アニェス Agnès 398, 399  
アニュレ Agnelet 87, 90  
アブラハム Abraham (イスラエル族長) 56, 330, 442  
アフラ・マズダ Ormuz 46  
アベラール (ペトルス・アベラルドゥス) Abailard 10, 13, 14, 33-36, 43, 55, 56  
アラン・バルブトルト Allan Barbetorte 19  
アリアノス Arrianos 25  
アリオスト Arioste 7, 83, 146, 349, 400, 440, 444  
アリストテレス Aristotele 36-39, 67, 85, 321-325, 327, 384  
アリストファネス Aristophanes 26  
アーリマン Arimane (闇の神) 94  
アルヴィアーノ Alviano, Bartolomeo di 280, 413, 415, 421, 427  
アルキアーティ Alciat 342  
アルキメデス Archimède 82  
アルキンディ Alkindi 37

## ジュール・ミシュレ (Jules Michelet)

フランス革命末期の1798年8月にパリで生まれ、父親の印刷業を手伝いながら、まだ中世の面影を色濃く残すパリで育ち勉学に励んだ。1827年、高等師範の歴史学教授。1831年、国立古文書館の部長、1838年からコレージュ・ド・フランス教授。復古王制やナポレオン三世の帝政下、抑圧を受けながら人民を主役とする立場を貫いた。1874年2月没。

## 桐村泰次 (きりむら・やすじ)

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒(社会学科)。欧米知識人らとの対話をまとめた『西欧との対話』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ『中世西欧文明』、ピエール・グリマル『ローマ文明』、フランソワ・シャム『ギリシア文明』『ヘレニズム文明』、ジャン・ドリュモ『ルネサンス文明』、ヴァディム&ダニエル・エリセーエフ『日本文明』、ジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』、アンドレ・モロワ『ドイツ史』、ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』、フェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティ I・II』、ミシェル・ソ他『中世フランスの文化』、ジュール・ミシュレ『フランス史』[中世] (I～VI) (以上、論創社)がある。

## フランス史Ⅶ ルネサンス

HISTOIRE DE FRANCE: RENAISSANCE

2019年2月10日 初版第1刷印刷

2019年2月20日 初版第1刷発行

著者 ジュール・ミシュレ

訳者 桐村泰次

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1785-9 ©2019 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。